

巴金『第四病室』論（二）

——患者の苦痛と医師の理想——

近藤 光雄¹

要 旨

拙稿「巴金『第四病室』論（一）」で考察した通り、『第四病室』の主人公の陸は、客体を透明化する眼差しを病室内の衛生状況や看護、治療の様子に注ぐことで杜撰な医療体制を告発した。本稿では、李劫人『同情』、孫俚工『医院裏的故事』と比較し、陸の外部世界への批判が人間の内面世界の排除によって成立することを考察する。曹禺『蛻変』、丁玲『在医院中時』も取り上げ、楊医師がいかなる理想のもと患者の肉体的・精神的な苦痛を排除したか検討する。

一、患者の苦痛

拙稿「巴金『第四病室』論（一）」²第1節で述べたように、『第四病室』³の主人公の陸は入院初日の6月1日、病室に案内されると周囲への観察を始め、寝台、戸棚、腰掛けの様子とその位置関係、備えつけの痰壺、茶瓶、溲瓶の数量、状態、置き場所、病室の地面、天井、窓の様子を細かく描写した。病室内の様子をつぶさに観察し記録することは入院患者の日記の持つ特徴の1つと言えようが、これ

¹ 神田外語大学外国語学部アジア言語学科中国語専攻語学専任講師。

² 拙稿「巴金『第四病室』論（一）——観察する眼差しと患者の死——」、『神田外語大学紀要』第34号（2022年3月）参照。

³ 巴金『第四病室』単行本の刊行状況は以下の通り。巴金『第四病室』（「良友文学叢書」新編第3種、良友復興図書印刷公司、重慶、1946年1月）。巴金『第四病室』（「晨光文学叢書」、上海晨光出版公司、1946年11月）。巴金『第四病室』（新文芸出版社、上海、1955年5月）。巴金『第四病室』（『巴金文集』第13巻、人民文学出版社、北京、1961年12月）。巴金『第四病室』（『巴金全集』第8巻、人民文学出版社、北京、1989年5月）。本稿では良友版に拠り、引用文や内容要約の直後に頁数を表記した。

は李劫人（1891-1962）『同情』⁴にも同様に見られる。この小説は、盲腸炎に罹り膀胱炎を併発した留仏中の中国青年の李が入院中の所感を綴った日記⁵から構成されている。病室内の様子を巡る李の描写は、1927年12月17日午後、下宿先から車で病院に搬送され病室に入るところから始まる。

私を運んでいた人は担架を下すと、まずは観音開きの扉をすっきり押し開けた。すると、逆巻く夜汐のような話し声が扉の奥からどっと溢れ出した。私は見ずにはいられなかったが、十分はつきり見えるわけでもなかった。日当たりのあまりよくない広々とした室内に、巻き煙草の煙と人々が吐き出した二酸化炭素が濛々と立ち込め、凝縮された薄い霧と化していた。霧の隙間からは灰色と白の2色が組み合わせあったベッドが見え、ベッドの上には体の半分か頭だけ覗かせている人形がたくさんいた。[……]

私を乗せた担架が扉をくぐるや否や、私は1個の磁石のように病室内の全て患者の視線を一身に集めた。[……]（第4期、17-18頁）

担架に乗せられた李は、仰向けに横になった体勢を変えることができず、立ち込める煙によって視界も遮られ、周囲を眺め渡すことが困難だったに違いない。それでも彼は、寝具の色、患者の身体の一部、患者たちから注がれた眼差しをどうにか捉え、可能な限り病室内の様子を記録しようとした。

『第四病室』において陸は患者の様子や患部の状態を事細かに描いたが、ほかの患者への関心は李として例外ではなかった。ベッドに移された李は早速両隣の患者を観察し始めた。

⁴ 李劫人『同情』、『少年中国』第4巻第4期（1923年6月）-第6期（1923年8月）。本稿では、引用文や内容要約の直後に期数と頁数を表記した。

⁵ 1927年12月16日-21日、25日、1927年1月1日、4日、10日、11日、14日、16日、17日、20日、22日、23日、27日、30日、2月13日、16日の計21篇。1月14日までの分は入院後追記したものである。

〔……〕左側の病床には、50歳前後の髭男が枕に靠れかかりながら座っていた。体格は優に私の2倍はあろうかと思われた。顔の血色がよく、気品があつて堂々と構えた様子で、茶色の目には優しさが溢れていた。〔……〕

〔……〕

右隣の方はベッドに仰向けに寝ていた。やはり50歳前後の髭男で、左側の人ほど恰幅はよくないが、立派な容貌であつた。彼の病気は医者が羅紗布団を捲り上げたときに分かつた。下腹部が縦横に3か所切開され、2か所はすでに塞がっていたが、1か所はまだ出血し乾いていなかった。〔……〕（第4期、18-20頁）

李は更に、左側の患者の「つげの木でできているような両脚」には「薬も塗られず包帯も巻かれず」、医師が「指で脛を叩くと、お寺の木魚のような音がした」と書いている。そして、患者の罹っている脚気がアルコール中毒によるもので、病室内の5分の3以上もの患者が同じ理由で脚気を患っていると記している（第5期、4頁）。このように、李は両隣の患者の体格や容貌、患部の状態を注意深く観察したばかりでなく、病名を特定し原因を洞察し、病室内の脚気患者の割合まで把握するほど、ほかの患者に強い関心を示したのである。

ほかにも、李は、部屋の奥行きと天井の高さ、扉と窓の数と位置、床や壁、天井の色、ベッドの数と間隔といった病室全体の様子、配膳される食事の種類や数量、順番、更にはパリの全行政区に置かれた平民病院の数、院内の診療科目と病室の数、医師や看護師の構成とその任務、入院手続きと入院費用なども書き記している（第4期、20-22頁、第5期、10-11頁）。病室という外部世界を巡る記録は多岐に渡るが、注目に値するのは彼の観察の目が自身の内面世界にも向けられていることである。例えば12月17日、李は夜間看護に当たるシャロン嬢を以下のように描いている。

〔……〕女は僅か 20 歳ちょっとで、きれいな顔立ちではなかったが、活発でユーモラスだった。毎晩ほとんど彼女が患者の看護に当たっていたので、入って来るなり、こっちから「こんばんは、シャロン嬢！」と声を掛けられ、あっちからも「こんばんは、シャロン嬢！」と声を掛けられた。シャロン嬢はと言うと、楽しそうにお喋りをし、真っ黒な瞳が細長い睫毛のなかでまるでダイヤのように素早く動いていた。このときの私の全身の神経は言うまでもなく〔腹部の〕痛みと張りに集中していたのだが、図らずも脳神経の一部が何と回想作業を始め、無意識のうちに『プチ・ショーズ』のなかの黒い瞳を考え始めた、「そうか！ ドーデの恋人の目はシャロン嬢の目よりきれいなはずはなかろう。だが、私の心のなかには更に大きな黒い瞳がある。惜しいことにあまりにも遠く離れている。もしかすると、シャロン嬢の目よりももっと透き通っているのかもしれない」と。〔……〕（第 4 期、22 頁）

李は、入院する直前から続く盲腸の痛みと膀胱の張りという肉体的な苦痛に耐えながら、まずはシャロン嬢の表情や性格の特徴、並びに彼女の当直を喜ぶ患者たちの振る舞いを捉えた。それから彼女の「真っ黒な瞳」を通してドーデ（1840-1897）『プチ・ショーズ』⁶の作中人物の目を連想し、更には遠く離れた中国にいる新妻との再会の叶わぬ寂しさに襲われたのである。このように、李は人間の観察を自身の心境描写へと発展させることで、様々な感覚、学識、心情の入り混じった複雑な内面世界を読者に展開してみせたのである。

自らの心境の変化を描写するに留まらず、李はその原因を突き止めようと分析的な考察まで試みている。1927年1月16日、手術を受けないことになった李は外科病室から内科病室に移された。内科病室では、患者数は少なく看護師はみな親切で、食事のメニューも外科病室のものより良かった。ところが、李は「どうし

⁶ Alphonse Daudet : *Le Petit Chose* 1868. 中国語訳は、法国都德 Alphonse Daudet 『小物件』（李劫人訳、黄仲蘇校、中華書局、上海、1922年11月）。

でも窮屈に思われ、重苦しく陰鬱な空気にすっぽり覆われている気がしてならなかった」（第6期、8-9頁）ため、17日、昨日不愉快な気持ちに陥った原因を分析した。それによれば、第1に、外科病室の患者は中年層が多く、打ち解けて談笑したり歌ったりするため、「たとえ心のなかに何か不愉快なことがあったとしても、その楽しい雰囲気によってきれいさっぱり吹き飛ばされる」のに対して、内科病室の患者は「生きる喜びが8割近く病魔に奪われてしまった」「よぼよぼの老人」がほとんどで、一日中物も言わず寝たきりであった。第2に、外科病室には李を除けば外国人はモロッコ出身の黒人しかいなかったが、彼はフランス人以上に口が達者で、モロッコの恋歌を披露することも屢々あったのに対して、内科病室には外国人が半数近くおり、ほとんどの者はフランス語での会話がままならないため、「お喋りをする時間が少なくなればなるほど、いよいよ死のようなどんよりとした空気に包まれるのであった」（第6期、9-10頁）。このように、内科病室は李にとって死を想像させる空間に過ぎなかったのだが、周囲への観察を行なう傍ら、自身の肉体的・精神的な苦痛を常に意識し、心境の変化を敏感に感じ取っていたという意味では、李は確かに自身の内面世界に強い関心を寄せていたのである⁷。

さて、本節冒頭で触れたように、『第四病室』の陸は入院初日、病室に入るや否や室内の様子を隈なく観察したが、それから間もなく周囲の患者に目を向ける。このときの様子は『第四病室』の手稿では以下のように描かれている。

こうした作業〔病室内を一通り眺め、荷物を所定の場所に納めること——筆者〕が終わると少し疲れてきた。しかも、胆のうのところがまたずきずきと痛み始めた。神経過敏のせいでもともと痛んでなどいないのかもしれない。というのも、尤先生の診療所を退院して1か月の間、心を紛らしてくれることがあ

⁷ 自身の内面世界に注がれる李の眼差しについては、中裕史「病床における語りから見えるもの——李劫人と巴金の作風の相違」、『アカデミア 文学・語学編』第99号（南山大学、2016年1月）参照。

りさえすれば、病気のことを忘れてしまうときがありさえすれば、何の苦しみも感じないのだ。ただ、暇なときに病気のことが頭に浮かぶと、その苦しみはなかなか治まらない。私を喜ばせるようなことや考えると嬉しくなるようなことが見つからない限り、それを忘れることはできないのだ。私は横になって休みたいと思った、今は寝るよりほかない。頭がぐらくらして、少し熱っぽいようだ。私は横になって休みたいと思った、学生服を脱いできちんと畳んでから、枕の下に敷いて枕をうんと高くした。毛糸のシャツを着たまま布団のなかで横になり、痛みを感じるところを手で押さえながら、目を大きく見開いて気ままに室内の周囲の様子を眺めた。〔……〕⁸

これは、陸が自身とほかの患者の位置関係を確認する直前の彼の様子を描いた部分である。とりわけ1重下線部には、入院直後の陸の心境が綴られており、彼がどれほど患部の痛みに苦しめられ、いかにしてそれを紛らそうとしたかが生き生きと描かれていよう。ところが、『第四病室』の手稿では1重下線部の内容が全て削除され、傍点部の短いものに書き換えられている⁹。巴金は作品の冒頭から、陸の耐え難い肉体的・精神的な苦痛を排除し、観察に徹する主体を前面に打ち出したのである。

6月3日(土曜日)の朝、レントゲン撮影を済ませた陸はその結果が知りたかったが、楊医師から結果は「来週まで待たなければならない」、「ほかに病気がなければ来週水曜日には手術室に入れる」(121頁)と告げられた。陸は、週明けまで最低2日間も結果を知らないまま過ごさなければならなかったが、

私は待つよりほかに仕方がなかった。私は思った、私は待つことができる、

⁸ 巴金『「第四病室」手稿珍藏本』(華文出版社、北京、2019年8月)、2-3頁。1重下線、傍点は筆者による。『第四病室』の手稿において、1重下線部は1重線または2重線で削除された箇所、傍点部は新たに書き加えられた箇所である。以下同様。

⁹ この修正は良友版、晨光版、新文芸版、文集版、全集版の全ての版本に踏襲されている。

それに待たなければならないのだ、と。私はこれ以上自分の問題を考えないことに決めた。時間を潰すため、寂しさを紛らすため、私は多く観察しなければならない。それはつまり、ほかの患者が病室内でどのように生活し、どのようにその苦しみと対峙したか注意深く観察することである。

私は確かにそれをやってのけたのだった。（121 頁）

と綴っており、自身の病気の程度や手術の日程を気に掛ける様子を窺わせることはなかった。「苦しみと対峙」する患者を観察することは、自身を病気の苦痛から解放させるどころか、却って病気の存在を思い出させ気分を落ち込ませるに違いない。ところが、陸は自身の病気や手術から敢えて目を背け、不安に陥ることもなく、観察する主体を確立することに努めたのである。実際、彼はその後の観察を通して、老鄭が寝台から転落した第 11 床を寝台に縛りつける様子や楊医師が肉食主義者の第 2 床の老人に食事内容の変更を強制する場面（140-155 頁）を捉え、患者が受けた非人道的な扱いを告発したのである。

観察に徹するあまり、陸は自身が手術を間近に控えた患者であることを忘れてしまう場合も少なくなかった。1 例のみ挙げると、6 月 4 日深夜、老李と見知らぬ中年男性がそれぞれ浣腸と胸毛の剃毛にやって来た。「一風変わった体験」に陸は「実に不愉快だ」と感じた（213 頁）が、手術がいよいよ現実味を帯びてきた段階においても、彼は不安に陥ることなく、剃毛に支払われるべきチップについて第 4 床と語り合った。そして、「奴らが金を取り逃がすはずはない！ これがこの病院の悪いところだ」（214 頁）という第 4 床の指摘に共鳴し、寝静まった頃にチップを取り立てにやって来た例の中年男性の嬉しそうな様子に対して「どうして人々はこんなにも見識が狭いのだろうか」（215 頁）と合点がゆかず、あの手この手で患者から金銭を搾り取る病院の医療体制に批判の目を向けたのである。

かくして陸は、術前において、ほかの患者の様子をつぶさに観察し病院の医療体制の不備を指摘する一方、患者としての自身の内面世界にはほとんど関心を払

わず、簡略的な描写を与えるに留まった。術後はどうだろうか。手術から2日経過した6月7日、陸は日記の冒頭で初めてその様子を振り返る。

私は自分がまだ生きているとは思いもしなかった。寝台に横たわって静かに（衰弱して力は出ないが）周囲の全てを見たり聞いたりすることができるのも思えなかった。自分がすでに死んでしまったものだと思っていた。実際には、長い夢、恐ろしい悪夢を見ただけだった。

昨日と一昨日の2日間をどう過ごしたのか、私には分からない。あの2日間の苦しみを思い出す勇氣は、私にはない。今日は相変わらず弱ってはいるものの、意識はかなりはっきりしている。それに、第8床のように日に日によくなるのだと信じている。

今では激しい痛みはほとんどなくなった。手術したところがときおりずきずきとしばらく痛むことはあるが、これは何とか我慢できる。不便なのは、体を動かさず、絶対安静で仰向けに寝ていなければならないことだ。しかも私は多く考えることができず、まだかなり弱っていて、疲れやすいのだ。流動食しか食べられず、胃腸の調子もよくない¹⁰。

1 重下線部の削除された箇所も含め、第1、2段落目の内容からは、陸が術後2日経過してもなお意識がはっきりせず、回復を絶望視していることが見て取れよう。第2段落目には術後2日間の苦しみを回想することの辛さが語られ、第3段落目には手術直後の傷口の痛みや2日経った現在の感覚も綴られているため、これらの内容は比較的陸の肉体的・精神的な苦痛に密着した描写と言えよう。とはいえ、術後体を動かせない陸にとって、周囲の様子を観察できなくなったことの不便さは、傷口の痛みを我慢すること以上に耐え難いものであった。第1段落目にも記

¹⁰ 巴金『「第四病室」手稿珍藏本』、112頁。

されているように、弱り果て己の死すら想像したにもかかわらず、彼は周囲を観察しようとする意欲だけは絶やさず持ち続けていた。実際、陸はこの直後診察に訪れた楊医師に促され手術当日麻酔をかけられたときの苦痛や不安を振り返ったものの、彼はそれ以上に、第2床の老人の容態を尋ねずにはいられず、梅毒の二次感染を懸念する楊医師を心配し、老人の梅毒感染が彼の息子に与えるショックを気に掛けたのである。体が衰弱し仰向けの体勢を余儀なくされても、陸は自身の肉体的・精神的な苦痛に目を向けるよりも観察することに徹したのである。

もう1例見ておくと、陸は以降就寝時までの様子を以下のように描いている。

私は疲れ、眩暈がして、太い包帯（正式名称は別にあるが、私はそれを太い包帯と呼んでいる。専らお腹を縛るために使われるものだ）で息苦しかった。背中が太い包帯の敷布の上に乗っかっていて非常に気持ち悪く、手足がだるくて痛かった。私はこれ以上考えることができなかった。

昼間はまあまあ気分が落ち着いていて、これといった具合の悪さは感じなかった。私は単に弱っていて、元気がなく、力が出ず、興味が沸かないだけだった。寝ようと思えば寝られるのだが、驚いて目を覚ますことが多く、目覚めるとますます疲れを感じるのだ。

夜は私に苦痛を齎した。電灯の明かりで、長机の真上から遠く差し込むものでも、目がちくちく痛んだ。患者同士の雑談は、ぼつりぼつり交わされるものでさえ、鋭い爪のように私の頭を引っ掻いた。よりによって、彼ら（第3床、第8床、第9床、それに目の摘出手術を控えている第12床）は夜になると大声でいろんな冗談を飛ばすのであった。私は苛立ち、不安で、傷口が痛み、お腹が張っていた。目を閉じると、例の細いゴム管が鼻の穴から入って来るような気がした。私は、言葉にできない辛さと言うに言われぬ嫌悪を覚えた。……私の思考と記憶は全て粉々になった。頭のなかに滓やガラスの破片がいっぱい詰め込まれていると思うときもあった。

昨晩は今晚よりもっと我慢ならなかった。あの苦しみはまるで終わりのないものに思われた。人の世が私から遠く離れていき、まるで地獄に落ち拷問にかけられているかのようなようだった。こんなとき、私がどんなに静けさを求めたことか。ところが、軽症の患者たちは喋ったり笑ったり、ひっきりなしに騒ぎ立てた。その楽しげな声は無数の棍棒のように私の頭を殴りつけた。第3床は歯をカチカチ鳴らし、拍子を取りながら低い声で歌っていた。第9床は笑い話をし、第8床は俗謡を唸っていた。そこに第12床が割り込んで来て、第8床に「18 摸」〔卑猥な数え歌——筆者〕を歌ってもらおうとしたが、第8床は彼に構わず自分で色気たっぷり「手を……伸ばし……触って……みる……お姉さんの……」と歌い始めた。平手打ちでも1発お見舞いしてやりたかった！ 大声で怒鳴りつけてやりたいとも思ったが、力が出なかった。……私は頭が痛く、傷口が痛く、手足が痛かった。これ以上我慢できないのではないかと恐れた。いよいよ最期が迫ってきたと思ったが、あの聞き慣れた声が聞こえてきた。(222-224 頁)

陸は、傷口の痛み、頭痛、腹部の張り、手足のだるさ、背中の不快感、息苦しさなどの肉体的な苦痛に襲われ、手術前後の記憶が蘇っては精神的な苦痛に苛まれた。「鋭い爪」、「滓やガラスの破片」、「地獄」、「無数の棍棒」といった比喻を交えた苦痛の描写は、『第四病室』を通観してもとりわけ精彩を放つ内容であり、李劫人『同情』の李のそれと比較しても遜色ないものである。しかしながら、そのような内面描写においても、陸は患者たちの行動記録を残さずにはいられず、彼らの騒々しい言動によって休息が妨げられ、肉体的・精神的に一層苦しめられたことを訴えたのである。その苦しさゆえに患者たちの一連の行動が陸の記憶に鮮明に刻み込まれたわけだが、何れにしても、陸は術後の重傷患者の静養を邪魔する患者たちの道徳の欠如、並びに楊医師以外彼らに雑談を止めさせる者がいないという杜撰な看護体制に批判の矛先を向けたのである。陸は、内面世界を描写

するときでも病室という外部世界に批判的な眼差しを注ぎ続けたのであり、単に肉体的・精神的な苦痛を紛らすためだけに外部世界に観察の目を向けたのではなかった。

かくして陸は、術後には自身の肉体的・精神的な苦痛をより積極的に表現するようになったとはいえ、患者を観察し医療・看護の体制を批判する姿勢を崩すことはなかった。これは、入院患者に一般的に見られるものなのだろうか。

外部世界への関心を考える上で、孫俚工（1894-1962）『医院裏的故事』¹¹の主人公の「私」が検討に値する。この小説は、ある友人女性が入院中に認めた手記から作者がお気に入りの部分だけ選び取って再構成したものである。第1篇「進院的第1日」（1921年10月）の冒頭では、自宅から病院に向かう最中の心境が綴られているが、「私」は「私の運命はもはや救うことのできない境地にまで来ており、もとより死は免れられない」と悲観視し、負傷した足が完治せず障害が残るようなら「いっそのこと死んでしまった方が清々する！」と絶望に陥っていた（1頁）。病院到着後、女友達の鄒が、左手が折れ右足も1節しかなく松葉杖を突きながら病室内を走り回る子どもを見て可哀想だと言うので、「私」は「半分死んでいる私の体をご覧なさい、あとは棺に入るだけよ！」（2頁）と言い返し、死の想念が再び脳裏を過った。そして、恋人の男性と鄒が病院を後にすると、見ず知らずの患者たちを前に「私の寂しさと苦しみは募る一方であった」（2頁）。

死の意識に囚われ孤独感に襲われつつ入院生活を始めた「私」は、院内の様子をどのように描いているのだろうか。彼女がまず通された婦人科診療室には、「男性医師が1人、女性医師が1人、看護師が3、4人いた。診察する者は診察し、薬を調合する者は薬を調合し、やたらに忙しくしていた！」（1頁）。続けて彼女は病室に案内されたが、「広々とした一般的な病室のなかに寝台が12台あって、向かい合う形で2列に並べられていた。私のものは東側の窓際の4台目で

¹¹ 俚工『医院裏的故事』、『小説月報』第13巻第5号（1922年5月10日）。本稿では、引用文や内容要約の直後に頁数を表記した。

あった」(2頁)。『第四病室』の陸や『同情』の李の描写と比較すると、診察室と病室への関心があまりにも希薄な簡潔過ぎるものではないだろうか。患者についてはどうだろうか。第2篇「龍太太和洪小姐」(日付未記入)には、

[……] 私の真向いにいる患者は寒湿で、歩くことができなかった。その左側の患者は胃病で、1週間以上も食事をさせてもらえず、牛乳しか飲まなかった。更に向こう側の患者は腹水が溜まり、数日前に注射器で抜いてもらったところ、血の混じった茶色い水が盥2つ分出た。その右側の患者は貧血で、医者が言うには1、2か月静養し、補血剤をたくさん摂らなければならないそうだ。[……] (3頁)

と描かれており、1人ひとりの病状の特徴をよく捉えている点に患者への関心を強く窺わせる。ところがこれらは全て、左隣の患者の龍太太が「私」の入院生活の不便さを気に掛け、老婆心ながら教えてくれたものであった。「私」は、患者たちの方を眺めたり、彼らの名前や病状を「私に報告する使者」(4頁)に尋ねることはあっても、彼らとは常に一定の距離を置き、直接話し掛けることはなかった。また、「私」の疑問に懸命に答えようとする龍太太の熱心さにもかかわらず、「私は自身の病気の痛みにすっかり惰気てしまい、聞き過ごしてしまうのだった」(4頁)。このように「私」は、死の意識や孤独感を増幅させないようほかの患者から目を背けると同時に、肉体的な苦痛が強いあまり彼らの様子を気に留める精神的余裕が持てなかったのである。

とはいえ、「私」がほかの患者に全く無関心であったかと言うと、そうではなかった。龍太太が退院した直後に20歳の洪小姐が入院したが、「彼女がどんな病気に罹っているのか誰にも分からず」、医者の診察も「毎回決まってカーテンに遮られていた」(5頁)。洪小姐が自ら病状を打ち明けることもなかったため、好奇心に駆られた「私」はまずは看護師、それから女性医師に訪ねた。そして、

「陰部が潰瘍し腫れ上がり、手術しなければ完治できない」（5頁）という、これまで覆い隠されてきた洪小姐の秘密を掴んだ。性病の持つ個人性が「私」の好奇心に拍車を掛け、今度は洪小姐を質問攻めにした。彼女によれば、13歳のとき6歳年上の男と結婚し、そのときから性病に悩まされてきた。恥ずかしさのあまり受診を先延ばしにしてきたため、そのうち癰が腫れ上がり、とうとう真っ赤なできものになってしまった。2年前に他界した夫は生前、性病に苦しむ洪小姐に虐待を繰り返し、頻繁に妓楼に外泊した。彼女は性病に負い目を感じ、夫の外泊を阻止することもできず、哀れな運命ばかり恨んだ……（5-6頁）このように、「私」は一連の経緯を突き止めるべく洪小姐のプライバシーをしつこく詮索したが、その積極的な態度は、龍太太の語る患者たちの様子に示した無関心さとは明らかに対照的である。その背後には、他人の秘密を所有し独占しようとする欲望が蠢いているのであろう。言い換えれば、洪小姐の性病の感染経路、時期を特定し、苦しい胸のうちを知ることで、「私」は、個人の私的領域に踏み込み事実関係を明らかにしようとする欲求が満たされ、更には、患者のなかで洪小姐の秘密を握っているのはただ「私」1人だけであるという優越感に浸ることができたのである。実際、洪小姐は数日後に手術を受け、回復後にはほかの患者の様子を「私に報告する使者」——「2番目の龍太太」（7頁）に変わってしまい、「私」はそれ以上彼女の過去を詮索することはなかった。

かくして「私」は、入院生活が齎す死の意識や孤独感、負傷した足の痛みといった自身の内面世界を描き、外部世界に存在する特定の他者に関心を寄せることで掻き立てられる他人の秘密への独占欲を表現したのである。このような関心は、自身の心境の変化を敏感に感じ取りその原因まで分析して見せた『同情』の李のそれと類似するところがある。一方、『第四病室』の陸は、医療体制の不備や看護体制の杜撰さを暴くために、「私」や李とは対照的に、自身の肉体的・精神的な苦痛を排除する傾向にあった。確かに、「私」が丁寧な診察を受け院内の礼拝にも度々参加し（9-12頁）、李が重症の貧乏学生として無料で平民病院に入

院した（第4期、14頁）ように、2作中の病院は比較的医療・看護の体制が整っているようであったが、それゆえに「私」と李は自身の内面世界に目を向けることができたと解釈するのは、短絡的に過ぎるだろう。反対に、ほかの患者が受けた強制治療や虐待などの非人道的な扱いを告発することが、告発する者自身の複雑な内面世界を排除する正当な理由ともなり得ないだろう。とはいえ、陸のこのような傾向は、彼自身のみならずほかの患者の内面世界を描く際にも見られるように思われる。それを検討するに当たり、患者たちが生命の危機に瀕したときに発した言葉が注目に値する。

6月1日、便秘に苦しみ食塩水の点滴を打たれることとなった第11床は、「打ちたくないよ、打ちたくないよ！」（「我不要打啦、我不要打啦！」）と泣き喚くように言った。点滴を打たれたときにも、「張先生、打たないでくれ、打たないでくれ！」（「張大夫、我不打啦、我不打啦！」）と言ったが、やがて声を立てなくなった。ところが、突然苦しそうに「打たないでくれ、打たないでくれ！」（「我不打啦、我不打啦！」）と叫び声を上げ、もがきながら、点滴を注ぎ足す胡小姐に「後生だから！ お嬢さん、打たないでくれ！ 打たないでくれ！」（「做做好事呀！ 小姐、我不打啦！ 我不打啦！」）と頼み込んだ。暴れるなど注意する張医師にも、「打たないでくれ、打たないでくれ、張先生、後生だから！」（「我不打啦、我不打啦、張大夫、做做好事呀！」）と言って懇願した。点滴を打ち終わるときも「打たないでくれ、打たないでくれ！ 後生だから！」（「我不打啦、我不打啦！ 做做好事啦！」）と叫んだ（46-50頁）。

6月3日、第11床は依然排便できず、昼食後突然「浣腸をしてくれ、我慢できないよ！」（「我要灌腸、我過不得啊！」）と叫んだ。なぜ医師に直接伝えないのかと汪小姐に責められたが、「我慢できないよ！……」（「我過不得啊！……」）と2度繰り返し叫んだ。水を飲まされても状況は変わらず、野獣のように「我慢できないよ、後生だから！ お嬢さん！……」（「我過不得、做做好事啊！ 小姐！……」）と喚き叫んだ。医師が来るまで待ちなさいと言われても、聞く耳を持た

ず「我慢できないよ、我慢できないよ！」（「我過不得、我過不得！」）と叫び続けた。患者たちが汪小姐に浣腸の手配を急かすと、「我慢できないよ！ 浣腸をしてくれ！ 金は出す、40元出そう！」（「我過不得呀！ 我要灌腸！ 我出錢、我出40塊錢！」）と叫び、繰り返し狂気染みた声を上げた。浣腸が済んだ後も排便できず、再び「我慢できないよ！ 我慢できないよ！」（「我過不得呀！ 我過不得呀！」）と叫び始めた。ついには、「お嬢さん！ 我慢できないよ！ 注射を打ってくれ！ 後生だから！ 張先生！ 張先生……」（「小姐呀！ 我過不得！ 我要打針！ 做做好事啊！ 張大夫！ 張大夫……」）と苦痛に満ちた叫び声を上げた（134-140頁）。

「彼は恐らく、自身の苦しみ以外は何も分からず、関心を持てなくなっていた。彼はただ叫び続けるのであった。まるである種の力に押されて、自身でも叫ばずにはいられないようだった」（136頁）と陸も書いているように、第11床の阿鼻叫喚は激痛に耐え兼ねた本能的な拒否反応から引き起こされたものである。肉体的な苦痛を言い表す言葉が「我不打啦」（1日）、「我過不得」（3日）にほぼ統一されており、激痛のあまり反射的に同じ表現を繰り返すよりほかなかったことが窺える。一方、『第四病室』の手稿では、6月3日、第11床は野獣のように喚き叫ぶところまで4回に渡り「難過」という言葉を発している¹²が、何れも塗り潰され「過不得」に書き換えられ、以降の表現との統一が図られている。このような修正、統一を経て本能的な拒否反応が強調されることで、患者の激痛を顧みることなく点滴を打ち続けることを疑問視せず、速やかに浣腸を済ませ患者を便秘の苦痛から解放する姿勢を欠いた、医療体制の不備や看護体制の杜撰さに批判の矛先が向けられたのである。生命の危機に瀕した患者における内面世界の表象は、このようにして犠牲にされたのである¹³。

¹² 巴金『「第四病室」手稿珍藏本』、66-67頁。

¹³ こうした傾向は、第2床の老人が6月3、4日に点滴を打たれたときの反応（147-148、196-199頁）を描写した部分にも見られるが、紙幅の関係上、本稿では紹介しない。

内面描写の単純化傾向は発話の統一以外の面にも見られる。6月9日午前、第2床の老人は声を震わせ興奮した様子で、墓地を譲ってもらえないか李三爺に掛け合ってきて欲しいと息子に頼んだ。すでに土地の先約がある上に十分なお金も用意できないと息子が言うので、老人は「李三爺にこう言いなさい、〔……〕わしを可哀想だと思って少し安くしてくださりゃ、来世牛馬のように働いて恩に報いるつもりじゃ、とね」（280頁）と言った。また、涙咽ぶ息子に向かって、老人は体を震わせながら息も絶え絶えに、

もうよくならんよ。わしは一生を無駄にしてきた。家にも帰れまい。まさか異郷に骨を埋めることになるとは。わしはただ、清潔な土地が欲しいだけじゃ。李三爺のあの土地が気に入った。お前さん、何とかお金を工面しておくれ。お前さんには長年苦勞を掛けてきた、これが最後だ。〔……〕（280-281頁）

と言った。更に、「すぐに行きなさい！ 早く土地を何とかしてくれたら、わしも安心じゃ」（281頁）と、立ち竦む息子を急き立てた。だが、老人はその吉報を知ることもなく、午後に息を引き取った。

遺言とも言うべき第2床の一連の言いつけは、埋葬地への拘り、異郷で亡くなることの無念さ、息子への感謝の気持ちなどを如実に吐露したものである。これに接した陸は、「その息子さんがたいへんお気の毒だった。〔……〕どうして息子さんにあんなのっぴきならぬことを無理にやらせるのだろうか」（281頁）と書いており、老人の死に際の複雑な心境に理解を示さなかった。巴金も後に、

〔……〕私は寧ろ彼〔息子——筆者〕にはいくらか同情し、今もなお老人の利己主義を咎めるものである。〔……〕盲目的に孝行をする時代は永遠に過ぎ去った。彼の父親は自身のことしか気に掛けず、息子が生きようが死のうがまるでお構いなしである。老人の病氣と葬儀は間違いなく息子の命を縮めること

になる。彼は借金を返済しなければならないが、それは決して容易なことではない。[……] ¹⁴

と振り返っており、墓地の購入を巡る老人の言動を厳しく非難した。文革後にも、「父親は息子に完済できない額の借金を残したため、奇妙な封建家族の関係がこの小さな公務員〔息子——筆者〕を死へと引き摺り込むのである」¹⁵と書いており、老人を責め立てる口調はいくらか和らいだものの、巴金は一貫して批判的な態度を取り続けた。老人の考え方に利己的、封建的なものが含まれていることは、確かに巴金の指摘する通りであろう。だが、心穏やかに死を迎え清らかな土地に眠り立派に最期を飾りたいという老人の死の覚悟は、やはり尊重されるべきものではないだろうか。巴金は老人の遺志を利己的、封建的なものとして退けることで死に際の患者の内面世界を単純化した。そのスタンスは医療・看護の体制を批判すべく観察に徹し肉体的・精神的な苦痛を排除する陸にも共通している。

二、医師の理想

陸における肉体的・精神的感覚は、前節で取り上げたもの以外にもいくらか描写されている。これは楊医師の存在に関わるものであるため、その検討に入る前に、まずは楊医師の人物像を検討しておく。

6月2日、第2床の首筋の爛れた瘡を処置する際、楊医師は優しい口調で「お爺さん、少し我慢してください、痛みますが大丈夫ですよ。腐った肉をきれいにしたら薬を付けますね」（105頁）と言って処置を始めた。老人は思わず声を上げたが、「大丈夫、大丈夫！ もう終わりますね！」（106頁）と慰めるように言

¹⁴ 巴金「談『第四病室』」（1961年10月25日）、『巴金文集』第14巻（人民文学出版社、北京、1962年8月）所収『談自己的創作』、432頁。

¹⁵ 巴金「3 関与『第四病室』」（1979年3月）、『創作回憶録』（生活・読書・新知三聯書店香港分店、1981年9月）、18頁。

った。再び苦痛を訴える患者に対して、「大丈夫よ、もう痛くありませんわ！」と言って処置を終わらせ、「ほっと息を吐くと微かな笑みを浮かべた」(106頁)。梅毒の二次感染が懸念されるため、緊張した面持ちで処置をしたとはいえ、楊医師は患者への気遣い、励まし、慰めの言葉を忘れることはなかった。「同情心を持ち、人情味に富む」¹⁶医師と評される所以である。

一方、処置を終えた楊医師は鶏か牛肉のスープを毎日届けるよう息子に言いつけた。菜食主義者の老人はその提案をきっぱり断ると、楊医師は嘲のような表情で「病状がこんなに悪化しているのに、まだそんなことを気にしてらっしゃるの？」(107頁)と言って、栄養のあるものを摂取するよう告げた。息子は卵から食べさせると言ったが、「入院したら医者言うことを聴かなくてはなりません。医者が言いつけたことは、全て患者のためになるものですから」(107頁)と反論した。6月3日早朝、息子が父親に豚の肝臓のスープを食べさせようとしたとき、楊医師は眉を顰め首を横に振りながら、「毎日少なくとも鶏のスープを2碗は届けなくてははいけませんわ」(127頁)と言った。息子が父親の治療のため2万円あまり借金していると言うので、「では彼に輸血をしましょう、お金はかかりません」(127頁)と不愉快そうな顔で言った。午後、老人が食塩水の点滴を打たれ、「もう死んじゃうよ……」(147頁)と只管苦しそうに叫んでいると、楊医師は微笑みながら「打たないと、それこそ死んでしまいますよ！」(147頁)と言った。それから畳み掛けるように、「今後、息子さんがスープを持って来たら食べますか？」、「豚の肝臓は食べますか？ お粥は食べますか？ 卵は食べますか？」、「菜食をするのではなかったのですか？」(147-148頁)と尋ね、点滴の痛みに苦しむ老人に無理やり肉食を受け入れさせた。そして、手つかずのスープを胡小姐に温めさせ、「お爺さんがそれを食べ終わるまで見張っていなさい。必ず食べさせて」(149頁)と言いつけた。

¹⁶ 李榮秀「浅析『在医院中』和『第四病室』里的女大夫形象」、『名作欣賞』2007年第8期(2007年4月)、62頁。

かくして楊医師は、院内の使い古された点滴療法を患者に強制しその食生活を強引に切り替えさせ、治療の名のもとで第2床と患者家族に少なからぬ肉体的・精神的な苦痛を与えたのである。これは医療体制の不備に起因するところが大きいとはいえ、こうした環境に身を置く同時代の医師たちはみな同様の治療を施したのだろうか。

曹禺（1910-1996）『蛻変』¹⁷は、南京陥落（1937年12月13日）より数か月前に後方の辺鄙な町に拠点を移した「××省立傷兵病院」が組織改革を経て1940年月上旬にかけて変貌を遂げていく様子を描いた作品である。作中の病院では、医師や職員らが家族を携えて住み込んでいたため、賭博、酒盛り、病室や医薬品の私物化、修繕費や公金の横領など腐敗と汚職が横行し、医療・看護の体制全体が機能不全に陥っていた。主人公の丁医師は、優れた医術の持ち主で、兵士たちが負傷兵を連れて来るほど篤い信頼を得ていた。彼女は、「一般的な後方病院の救護と治療の知識水準を高め、負傷兵たちの不必要な苦痛を減らすよう努めなければならない」（86頁）との信念のもと、昼夜を問わず日々負傷兵の手当てをした。薬品不足により激痛に襲われ重体に陥る負傷兵を放って置けず、身銭を切って薬を買い与えることもあった。また、幾度となく庶務主任や薬剤師に掛け合い薬品の発注を催促しその在処を尋ねたが、米の売買取引に勤しむ庶務主任は2週間前に済ませたという納品の督促を怠り、戦区の拡大により物流が滞り納品は難航を極めると言い訳をした。丁医師はその無責任ぶりに激怒し辞職を決意するが、中央政府より病院の改組命令を受けた梁公仰から協力を求められ、病院に留まると決心した（以上、第1、2幕）。

改組後の「前線傷兵病院」では、救護所、診療所、手術治療チームの充実化が図られ、新任の羅院長と丁医師は、あらゆる負傷者と捕虜に「最も行き届いた看護と最も完璧な治療」を提供することを目標に掲げていた（254-255頁）。丁医

¹⁷ 曹禺『蛻変』（商務印書館、1940年10月）。本稿では、曹禺『蛻変』（「曹禺戲劇集」第5種、文化生活出版社、重慶、1941年1月）に拠り、引用文や内容要約の直後に頁数を表記した。

師は僅か1か月の間に1人で139件もの手術をこなし、命の危険を顧みず自ら前線付近の救護所に赴き負傷者の救護活動に当たった。病院にO型血液が不足するなか、李大隊長への輸血まで行なった（以上、第3幕）。その後、経験豊かで知識が豊富な人材を中心に大都市××に「後方傷兵病院」が成立し、職員たちは「自ら進んで仕事に取り組み、できる限り完全を求める」（317頁）という梁公仰の信念に導かれ、新たな責任感を形成した。丁医師は、負傷した息子の丁昌を看病する傍ら徹夜で負傷兵の妻の助産に当たり、我が子の手術間際にも重篤患者のもとに駆けつけ、ほかの患者の治療を優先した。術後、彼女は二度と息子を戦場に送り出すまいという利己心を反省し、丁昌を入隊させ祖国に捧げると決意した（以上、第4幕）。

『蛻変』に対する同時代の評価は批判的なものが多い。王平陵（1898-1964）は、清廉な役人と職務に忠実な医師が自らを犠牲にして働いても、一時的に人心を奮い立たせ気風を正すのが関の山、大衆を主体とする革命勢力を形成し健全な制度を打ち立て革命事業を推し進めるには至らないと指摘した¹⁸。胡風（1902-1985）は丁医師を、祖国に忠誠を尽くす「救済者」と慈愛に満ちた感情豊かな「受難者」の両側面を併せ持つ「愛国主義者」と捉える一方、梁公仰の登場によって漸く存在意義が保証される人物であるため、自ら歴史を切り拓く戦闘精神を欠いた「運命の悪戯に左右される弱者」と評した¹⁹。これらの批判とは対照的に、「曹禺戯劇集」の出版を手掛けた巴金は、『蛻変』を一読して「ある種の熱望、ある種の力が体のなかから沸いてきた」と感じ、「何かをしたい、人助けになるような何かをしたい、この僅かな精力を惜しみなく捧げる機会を持ちたい」²⁰という意欲を掻き立てられた。これは、院内における封建的な旧勢力を一掃し

¹⁸ 王平陵「7 『蛻変』的意識与技巧」、『新狂飈時代』（商務印書館、1944年3月）、141-144頁。

¹⁹ 胡風『『蛻変』一解』（1942年10月26日、桂林）、『文学創作』第1巻第6期（1943年4月1日）。『曹禺研究資料（上下）』（『中国現代作家作品研究資料叢書』、田本相、胡叔和編、中国戯劇出版社、北京、1991年12月）、993-996頁。

²⁰ 巴金「後記」（1940年12月16日在重慶）、曹禺『蛻変』、2頁。

進歩的な医療環境を整備した梁公仰の功績、並びにより良い医療を提供すべく献身的な努力を続けた丁医師の活躍に感銘を受けたためであろう。巴金は、『蛻変』を通して「大きな希望を目にし、大きな勇気を手にした」²¹と言うが、そのような奉仕への意欲が『第四病室』の楊医師に結実したのだろうか。その検討に入る前にもう1人の女性医師を取り上げたい。

丁玲（1904-1986）『在医院中時』²²は、1940年前後に設けられた、延安から程遠い所にある病院が舞台となっている。主人公の陸萍は、野戦病院で負傷兵の看護に当たった後、延安を訪れ共産黨員となったが、勉学の道半ばにして助産師として病院に派遣された。院内では、産婦たちは未消毒の紙を使い看護師の洗濯を拒み、産後3日も経たずして1人で便所に行き、衛生観念が極めて低かった。雑役係は何もかも部屋の隅に押し込み、洗濯人は減多に来ず、庭の至るところに使用済みの脱脂綿やガーゼが散乱していた。医師の妻たちは3か月間の看護教育を受けたが、看護に対する関心も知識もなかった。これを見兼ねた陸萍は、庭をきれいに掃除し子どもを着替えさせ、産後炎症を起こした産婦に痛い思いをさせないよう自ら薬の交換を行なった。会議では院内の不合理なやり方を包み隠さず取り上げ、医療環境の改善を巡って多くの人と衝突した。また、産室に来る人がいれば、使い回される注射針は曲がり、ゴム手袋は破れ、病室が寒いと訴えた。そして、患者たちが清潔な布団、暖かい病室、栄養のある食事、規則的な生活を得られるよう交渉し、産婦や赤子のちょっとした要求を巡って管理員、総務部、秘書長、ひいては院長とも言い争った。更に、銃弾摘出手術が行なわれたとき、火鉢を3つも焚いて暖を取ったことで陸萍と外科病室の助手が一酸化炭素中毒で倒れたため、患者と医師の命を危険に曝しても石炭ストーブを買い足そうとしな

²¹ 巴金「後記」、曹禺『蛻変』、2頁。

²² 原題は『在医院中時』、『穀雨』創刊号（1941年11月15日）初出。延安整風運動（1942年）の後、内容の修正と作品名の変更を経て、『在医院中』として『文芸陣地』第7巻第1期（1942年8月30日）に掲載。本稿では、『中国新文学大系 1937-1949』第3集「短編小説巻1」（本書編輯委員会編、上海文芸出版社、1990年12月）所収『穀雨』版に拠った。

い院長のやり方に疑問を抱いた。広範な大衆のためにあるはずの革命が近い間柄の同志への思いやりに欠けると感じる一方で、彼女の一連の言動にプチブル意識、知識人のヒロイズム、自由主義のレッテルを張り、党派性の弱さを指摘する者も現れた。そこで、劣悪な環境のなかで両足を切断された患者から、医療体制の変革は徐々に進めるべきだと諭されたが、陸萍は学業に専念すべく病院を離れた。

『在医院中時』は発表後間もなく、延安整風運動の最中に批判を受けた。燎熒によれば、丁玲は党が設立した病院と陸萍の周囲の人物を「進歩的な改革への志しが抹殺された保守的な環境」及び「精神的な活動」が見られない「救い難い一群」として否定的に描くことで、環境及び同志たちの進歩には無関心で集団から遊離した陸萍の人物像を際立たせ、個人主義を宣伝した²³。燎熒は反右派闘争（1957年）時期にも、丁玲は、党の指導のもとで乗り越えてきた労力と物資の困窮を作中の病院における暗黒面と見做し、党の革命事業の不合理性として暴き出したのみならず、一般大衆、組織生活、党そのものを悪し様に描くことで知識青年と労農幹部の関係、党員と党の関係を引き裂こうとしたと批判した²⁴。張光年も、丁玲は「自身の極端な個人主義の魂を懸命に美化し」、「工農兵全体を否定し」、「延安全体、党全体を攻撃した」と述べた²⁵。文革終息後、作家の名誉回復と作品の再評価が進められるなか、廠家炎は、陸萍が医学意識を十分に活用し、「可能な限り病院の仕事を改革し、患者や産婦の医療衛生条件を改善した」ことに積極的な評価を与えた。彼は更に、陸萍と周囲の環境との間の矛盾を、彼女の「革命への強い責任感に繋がる近代の科学的文化要求」と医師や患者らの「小生産者の無知蒙昧、偏狭、保守、利己、安逸などの思想的悪習」との間の対立とし

²³ 燎熒『『人……在艱苦中生長』——評丁玲同志的『在医院中時』、『解放日報』（1942年6月10日）。『丁玲研究資料』（『中国現代作家作品研究資料叢書』、袁良駿編、天津人民出版社、1982年3月）、274-281頁。

²⁴ 王燎熒「丁玲の小説——『在医院中時』的反動性質」、『文芸報』1957年第25期（1957年9月29日）。

²⁵ 張光年「莎菲女士在延安——談丁玲的小説『在医院中』」、『文芸報』1958年第2期（1958年1月26日）。

て理解し、作中には革命家が小生産者の思想的悪習を改造することの困難さが描かれていると評した²⁶。以降の研究も概ね陸萍を改革者として評価する傾向が強くなり、張永泉は、丁玲が環境の不合理性に対する陸萍の改造を肯定したことで、「小生産者の思想意識及び官僚主義を改造する、知識人の担う歴史的使命を明らかにした」と指摘した²⁷。

かくして、丁医師と陸萍はともにより良い医療の実現に向けて医療・看護の体制変革に率先して取り組んだが、そのような意識は楊医師には見られない。彼女は菜食主義を貫こうとする第2床の意思と信条を無視し回復のためと称して独断で食事内容の変更を強制したが、それは院内の看護師たちが効果を見込んでほとんど全ての患者に飲水を強制したことと同等な強硬手段であった。彼女が老人に打った点滴も院内で使い古された方法に過ぎず、患者個人の症状に合わせた治療ではない。また、老人を寝台に横たわせようと「今度起き上がったら食塩水を何本か余計に打ちますからね」（180頁）と注意した点から見ても、医師の指示に従わなければ点滴の本数を増やすと言って第11床を脅かした張医師と同様に、彼女にとって点滴とは懲罰を与えるための手段でさえあった。そして、第2床が十分な治療を受けられずに死を迎えたことに責任を痛感しつつも、「人並外れた医術を身に付けたとしても人を救えるとは限りません。私はお金には勝てない、お金がない人は私から利益を受けることはできないのです」（300頁）と言って人命を救えない医療体制の現状に甘んじる姿勢を見せた。病院が薬品を提供すべきだという陸の主張に対しても、「病院には普通の薬が数種類あるだけです。あなたは病院がどれだけ貧しいか分かっていないわ」（300頁）と実情を紹介し、病院の困窮ぶりを理由に医療環境の改善が叶わないことを正当化したのである。医師たる者は必ずしも等しく、患者に薬を買い与え自ら輸血し身内の人間の生死

²⁶ 蔽家炎「現代文学史上の一椿旧案——重評丁玲小説『在医院中』、『鐘山』第1期（1981年2月15日）。『丁玲研究資料』、502-514頁。

²⁷ 張永泉「『在医院中』：革命知識分子走向成熟的艱苦歷程」、『中国現代文学研究叢刊』1987年第4期、110-122頁。

以上に患者の命を重視するような自己犠牲の精神を具えていなければならないというわけではない。寧ろ、患者に不必要な苦痛を与えないよう、「近代の科学的文化知識」²⁸を十分に発揮し症状に見合った治療方法を模索提案し、使い古された手段を改革するよう上層部に働き掛けるなど、医療体制全体の変革に向けた努力こそ必要なのではないだろうか。「この僅かな精力を惜しみなく捧げる機会を持ちたい」という巴金における奉仕への意欲は楊医師の人物像に実を結ぶことはなかったようだが、彼女がこれまで「患者の苦痛を慰めるばかりでなく、精神面でも患者を励ます」²⁹医師と評されてきたのは何ゆえだろうか。これは、陸に対する楊医師の接し方に関係する。

6月2日朝食後、病室を出た陸は、用務員の老張から便所の場所を教えられたが、「彼がよりによって『手術室』と『霊安室』という2つの恐ろしい場所に触れた」ので「突然体がぶるっと震えた」（70頁）。便所に入ると、「盲腸を切るのか?」、「そんな病気〔胆のう摘出——筆者〕、聞いたことがない、大手術だよね」、「局部麻酔、それとも全身麻酔?」（75頁）と第8床から質問攻めに遭い、陸は「私はほかの人に手術のことに触れて欲しくなかった、私は少し怖かった。彼の冗談交じりの2言3言は、更に人を不安にさせた」（75-76頁）と思った。便所を出て楊医師に出くわしたので、「私の手術、危ないものではないですよ?」（78頁）と尋ねると、楊医師から「大丈夫、大丈夫よ!」と言われ、先月馮医師が同じ病状の患者の手術を成功させたばかりで「危険なものではありませんから、怖がることはないわ」（78頁）と励まされた。すると陸は、「平気です、怖くありません」（78頁）と返事し、「彼女の言葉で一気に不安が吹き飛び」、「晴れやかな気持ちになった」（79頁）。6月3日夕暮れ時、陸は散歩中に楊医師から「詩を読むと心をいくらか清らかにすることができる」（158頁）と言われ、『唐詩三百

²⁸ 巖家炎「現代文学史上の一樁旧案——重評丁玲小説『在医院中』、『丁玲研究資料』、508頁。

²⁹ 冀衛霞「生存困境中的『一線亮光』——浅析巴金『第四病室』、『商丘職業技術學院學報』2010年第3期（2010年6月）、70頁。

首』を渡された。陸は本を受け取り、今度手術を受けるとき「あなたがその場にいらっしゃれば、私は絶対に怖がらないと思います」（158 頁）と言った。楊医師は「では、必ずその場にいるようにします」（158 頁）と約束し、更に「特に怖がる必要はありませんよ。先程、あなたと同じ病気の患者を 1 人受け入れました。[……] 彼〔第 32 床——筆者〕は大分体調がよくなり、来週には手術をします」（158-159 頁）と紹介し、手術への不安を取り除こうとした。かくして、陸は常に楊医師に励ましの言葉を求め不安を慰めてもらったのに対して、楊医師はその都度陸を勇気づけ、『唐詩三百首』を渡し気持ちを落ち着かせようとした。両者のこうした関係にはいくつかの特徴が見られる。

第 1 の特徴として、『唐詩三百首』に依存する心理の形成が挙げられる。6 月 4 日の朝、陸のところに立ち寄った楊医師は、『唐詩三百首』を読んだかと尋ね、再び「詩は人を善良にし、純潔にしてくれます。心が晴れないとき、私はいつも詩を読みます」（183-184 頁）と語った。その日の午後、陸は楊医師から手術日時（5 日朝 8 時）を伝えられたが、「心臓がどきどきし、静けさが掻き乱され」、「顔色も変わってしまったようだった」（192 頁）。彼は手術への恐怖を遠ざけようと第 32 床の患者の様子を尋ねたが、楊医師から「レントゲンの結果も出ていますから、あなたは大丈夫ですよ」（192 頁）と励まされると、「彼女の親切な微笑みを見、優しい眼差しに触れ、私は勇気が回復しつつあると感じた」（192 頁）。楊医師は去り際にも再度、「心が落ち着かず怖くなったときには唐詩を少し暗誦するといいわ、心を落ち着かせてくれますから」（193 頁）と言って詩を強く勧めた。このように、楊医師は陸を励ましつつも繰り返し『唐詩三百首』を引き合いに出し、彼女自身に拠らずとも陸が自ら進んで詩を読むことで不安を解消できるよう仕向けた。実際、陸はその後も「怖いとは言わないが、相変わらず興奮し、心を落ち着かせることができなかつた」（193 頁）上、第 4 床から「大手術で全身麻酔、どんな具合だろうね？」（194 頁）と尋ねられ、第 6 床からも「明日手術ですか？ 結構ですな！」（194 頁）と羨ましがられたため、不安を

紛らそうと「楊先生の言いつけを守ってしっかりよく読んでおこう」（195頁）と詩を読み始め、五言律詩の「音楽的性格を持つ詩句によって別世界へと誘われ、次から次へと夢の世界に足を踏み入れた」（195頁）という。不安に襲われた陸は楊医師の期待する通り、彼女の分身とも言うべき『唐詩三百首』に縋り付くことで「掻き乱された心が次第に落ち着きを取り戻した」（195頁）のである。自身の内面世界に正面から向き合い手術への恐怖との格闘の末それを払拭する姿勢を、彼は持たなかったのである。他者及び書物への依存による不安解消の道筋を規律化する心理がここに現れている。

『唐詩三百首』によって患者を慰めようとする楊医師の考えは、患者の内面を単純化するスタンスに裏打ちされている。端的な例を挙げれば、6月4日午後、血圧測定や採血、採尿のためにやって来た楊医師は、陸から「明日の今頃、どうなっているんでしょうね」と尋ねられ、「辛いのは精々明日1日だけよ、ほかの人が耐えられましたから、あなたにだってきっと耐えられますわ」（204頁）と返答した。陸は「これでもう安心だと思って、感謝の気持ちを込めて彼女に微笑みかけた」（204頁）。楊医師が3日にも第32床の様子を紹介し陸を励まそうとしたことは上述した通りであるが、このように彼女は、陸自身の手術に対する不安や恐怖をほかの患者のそれと区別することはなかった。同様の病状に苦しむ患者たちを同列に並べることで、楊医師は個々人の内面世界の違いを排除し、全て均質的なものとして捉えていたのではないだろうか。

今1つの特徴として、「母なるもの」のイメージの形成を指摘しておきたい。6月4日深夜、陸は24年間の人生に未練を感じ、「これで命を落としてしまうというのか？」（216頁）と考えた。そして、6年あまり1度も会わず、手術のことも知らない父親のことを思い出し、唯一の血縁者との永遠の別れに名残惜しさを覚えた。加えて、第3病室の女性患者が心を引き裂かんばかりの鋭い叫び声を上げるので、「よりによってこんなときに！」（217頁）と思い、不安と恐怖を募らせた。突然、『怖がることはないわ！』という聞き慣れた声が出て、黒髪に大き

な目、厚い唇に堅苦しくない優しい微笑み」が目に浮かび、陸は心のなかで「楊先生！ 助けてください！ 僕はほんの 24 歳の子どもなんです」（217 頁）と思った。陸が低い声で呻いていると楊医師が現れ、入眠剤を処方されると彼は「心が温まり、気持ちが落ち着いた」（218 頁）という。後妻を迎えようとした父親との間で対立が生じたことで陸は家を飛び出したが、それは亡き生母に強い愛着を持っていたからである。それゆえ彼は、入院後楊医師に「母なるもの」のイメージを求め、依存する心情が芽生えた³⁰。同時に、手術への恐怖によって喚起される死の想像が父親との離別への意識と相俟って、陸はますます肉親を追い求める心情を募らせ、自らを「子ども」と称して楊医師に母親としての人格を与えたのである。

かくして陸は、楊医師に励ましの言葉を求め『唐詩三百首』を読むことで手術への不安と恐怖を払拭し、楊医師に母親としての人格を与えることで自らの死の想像を取り除こうとした。一方の楊医師は、陸の不安と恐怖を、ほかの患者のそれと同一視し、『唐詩三百首』によって取り除き、代わりに善良さと純潔さを与えようとした。陸の不安と恐怖は、彼が自身の内面に自ら向き合う努力のもとに解消されたわけでもなければ、患者の個別の心理状況に即した医師の対応によって取り除かれたわけでもなく、言わば手つかずのまま放置され宙吊り状態を保っているのである。

術後、陸が自身の肉体的・精神的な苦痛に目を向けるよりも周囲を観察することに徹し、内面世界を描くときでも外部世界を批判する姿勢を崩さなかったことは、本稿第 1 節で見た通りである。物語が進行するにつれ楊医師への依存を強めていった彼は、「人間というものは自身の利益のために生きている」という入院前の思い込みを打ち捨て、楊医師が「私を修理が必要な機械としてではなく、1 人の人間、友人や兄弟のような人として接してくれたことで、私の病んだ心がど

³⁰ 川田進「巴金の小説にみる『甘え』の構造」、『国際研究論叢 大阪国際大学紀要』第 1 巻第 1・2 号（大阪国際大学、1989 年 3 月）、160-161 頁。

れほどの慰めを得たことか」と感激するのであった（305頁）。陸のこの言葉に楊医師の「素晴らしい職業道徳と火のように熱い心」³¹を見て取る先行研究もあるが、翻って言えば、楊医師から受けた励ましや慰めに深く心を動かされるに至って、陸は彼女の理想とする善良、純粋、有用な人間として完成されつつあったのではないだろうか。そして、物語の終盤の6月11日、楊医師は帰省するため急遽病院を退職することとなり、去り際に記念の印として、『唐詩三百首』並びに10日に陸に手渡した『在甘地先生左右』³²の2冊に名前を入れることにした。その際、「何度も何度もこの本を読めば、自分自身がガンジーの傍にるように感じられますし、あなたをもっと善良に、純潔に、そして人の役に立つようにしてくれますわ」（356頁）と告げ、陸がますます楊医師の理想とする人間像に近づくよう希望を託した。また、2冊の本に宛名が記されたが、物語が始まって以来、ほかならぬ楊医師の手によって初めて陸の名前「徳良」³³（良徳の意）が与えられた。陸が彼女の理想に適った人間であることが示され、彼が今後「良徳」の道を踏み外さないよう自己を監視する眼差しが組み込まれたのである。案の定、陸は6月18日、「私にはもう分かっています、もっと善良に、純潔に、人の役に立つようにならなければならないのだ」（364頁）との思いで病院を後にし、楊医師の教を自律的に自身に強制する人間へと成長を遂げたのである。

おわりに

本稿では、『第四病室』の主人公の陸と楊医師が患者の肉体的・精神的な苦痛をいかなるものとして捉えたかについて考察した。李劫人『同情』の主人公の李は、病室内の様子を観察しほかの患者に関心を示したが、自身の心境の変化にも

³¹ 郎英俊「悲恨、真摯、深沈、向往——読『第四病室』随想」、『中央民族学院学報』1988年「漢語言文学増刊」、69頁。

³² 曾聖提『在甘地先生左右』（古今出版社、重慶、1943年5月）。

³³ 巴金『「第四病室」手稿珍藏本』、182頁。なお、「徳良」は塗り潰され「××」に書き換えられている。また、陸の氏名は、良友版、晨光版、新文芸版では「陸××」、文集版、全集版では「陸懷民」。

目を向け、その原因について分析的な考察を行なった。一方の陸は、術前には自身の病気の程度や手術の日程を気に掛けず、ほかの患者が受けた非人道的な扱いを告発し、術後には肉体的な苦痛に襲われながらも周囲への観察を怠らず、杜撰な看護体制を批判した。陸は、一貫して自身の肉体的・精神的な苦痛を排除する傾向にあったが、これは、孫俚工『医院裏的故事』の「私」が、外部世界に存在する特定の他者に関心の目を向けつつも、その秘密を独占し優越感に浸るという、自身の内面世界の描写に重心を置いたこととは根本的に異なる。激痛に耐え兼ねた患者たちの口から反射的に発せられる言葉を統一し、息子に墓地を購入させる第2床の遺志を利己的、封建的なものとして退ける、内面描写の単純化傾向も、陸のそのようなスタンスから生まれたものである。

一方の楊医師は、曹禺『蛻変』の主人公の丁医師、並びに丁玲『在医院中時』の主人公の陸萍のように、率先して医療・看護の体制変革に取り組むどころか、治療と称して第2床に食事内容の変更や点滴療法を強制し、肉体的・精神的な苦痛を与えた。楊医師の同情心や職業道徳が積極的な評価を受けるのは陸を励まし勇気づけたからに過ぎないが、実際のところ彼女は、陸の手術への不安をほかの患者のそれと同一視し、陸が彼女から与えられた書物に依存し不安解消の道筋を規律化するよう仕向け、彼が善良、純潔、有用な人間として完成されることを期待したのである。

さて、陸における肉体的・精神的な苦痛の排除には自己犠牲の精神を見て取ることができる。しかし、自己犠牲の精神は医療・看護の体制への批判という名目のもと合目的化され、自ずと自己利益の追求と結びつくことになる。一方、陸における完成が期待される善良、純潔、有用な人間像は社会的に善い存在と言える。だが、楊医師が陸の肉体的・精神的な苦痛を顧みることなく自らの理想的な人間像を彼に強制したことは、倫理的に善い行為とは言えない。このように、陸も楊医師も目的遂行のために自他の内面世界を犠牲にする点において共通しているが、これは巴金の自己拡張の思想に基づくものと考えてよい。そこに含まれる道

徳的な問題については、巴金が受容した西洋倫理学を参照しつつ、改めて論じたい。

参考文献：

- 『小説月報』第13巻第5号（1922年5月10日）。
- 『少年中国』第4巻第4期（1923年6月）-第6期（1923年8月）。
- 曹禺『蛻変』（「曹禺戯劇集」第5種、文化生活出版社、重慶、1941年1月）。
- 曾聖提『在甘地先生左右』（古今出版社、重慶、1943年5月）。
- 王平陵『新狂飈時代』（商務印書館、1944年3月）。
- 巴金『第四病室』（「良友文学叢書」新編第3種、良友復興図書印刷公司、重慶、1946年1月）。
- 巴金『第四病室』（「晨光文学叢書」、上海晨光出版公司、1946年11月）。
- 『現代中国文学全集第7巻 巴金篇』（岡崎俊夫ほか訳、河出書房、東京、1954年9月）。
- 巴金『第四病室』（新文芸出版社、上海、1955年5月）。
- 『巴金文集』第13巻（人民文学出版社、北京、1961年12月）。
- 『巴金文集』第14巻（人民文学出版社、北京、1962年8月）。
- 巴金『創作回憶録』（生活・読書・新知三聯書店香港分店、1981年9月）。
- 『丁玲研究資料』（「中国現代作家作品研究資料叢書」、袁良駿編、天津人民出版社、1982年3月）。
- 『巴金全集』第8巻（人民文学出版社、北京、1989年5月）。
- 『中国新文学大系 1937-1949』第3集「短編小説巻1」（本書編輯委員会編、上海文芸出版社、1990年12月）。
- 『曹禺研究資料（上下）』（「中国現代作家作品研究資料叢書」、田本相、胡叔和編、中国戯劇出版社、北京、1991年12月）。
- 巴金『「第四病室」手稿珍藏本』（華文出版社、北京、2019年8月）。